朝日選書
173

小林初枝

おんな三代

関東の被差別部落の暮らしから

小林初枝著

おんな三代

関東の被差別部落の暮らしから

朝日選書 173

小林初枝<こばやし・はつえ>
1933年埼玉県児玉郡児玉町に生まれる。1967年中央大学法学部法律学科(通信教育課程)卒業。現在埼玉県立児玉高校司書。
〔著書〕
『被差別部落の世間ばなし』『こんな差別が』(以上，筑摩書房)『死んで花実が咲くものか』(解放出版社)

おんな三代 関東の被差別部落の暮らしから　朝日選書 173

1981年1月20日　第1刷発行　定価980円
1983年2月10日　第2刷発行

著者　小林初枝
発行者　初山有恒
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104 東京都中央区築地5-3-2　電話03(545)0131(代)
編集・図書編集室　販売・出版販売部　振替・東京0-1730

© H. Kobayashi 1974　Printed in Japan　装幀・多田進

0336-259273-0042

目次

きちの時代 3
はだしの嫁入り 5
厄年の子 15
傷つく心 21
九餅を搗く 27
借金に追われる 34
謀判 40
トンカン車 44
お弱弁当 49
身馴川の氾濫 53
夜の桑束ね 59
侮蔑の声 64
重なる災難 69
仙太郎の死、三木の誕生 75

神と仏 84

三木の時代 91

だっこの思い出 93
パラソルと土龍 100
うどん作り 105
関東大震災 109
山狩り 112
朝鮮人虐殺 118
亡霊の声 121
黒いめし 124
ハタ織り 131
女中奉公 138
清鬼の死 143
三木の家出と結婚 150
西埼玉強震 155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三十三軒着物 160
きちの子守唄 164
三木の離婚 168
小作料裁判 176
失った小作地 184

初枝の時代 191

竹っ葉運び 193
湯上がりの散歩 198
つつじと桑の実 204
桑の皮むき 210
滑走路作業 216
妾の子 219
しょい出し 224
反抗期 227
身馴川の合戦 231

アルバイト　237
事務職員　244
職員室の空気　249
差別事件　254
八方塞がり　261
通信教育　264
きちの発作　268
根なし草　274
し尿処理場反対闘争　282
きちの死　286

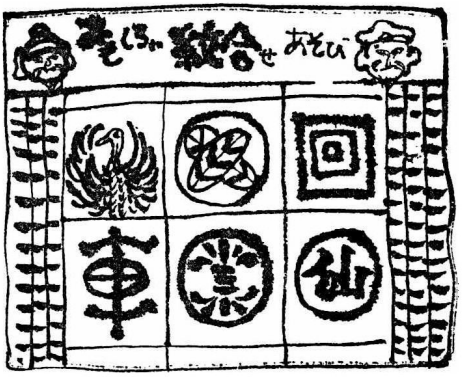
選書版へのあとがき　297
「おんな三代」に寄せる　荒井貢次郎　301

カット・熊谷博人

おんな三代

関東の被差別部落の暮らしから

きちの時代



トッコ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

はだしの嫁入り

武蔵野のきわまるところ、関東平野の一隅に、四方を山に囲まれた箱庭のような里がある。埼玉県児玉郡児玉町。古くから養蚕が盛んで、町名も蚕玉(こだま)から転化したといわれている。

町にのり入れている唯一の鉄道、国鉄八高線の窓から顔を出すと、〝瓦の屋並みと白壁の美しい町〟という印象を受けた——そんな記事が『旅』という雑誌にのったことがある。第二次世界大戦後は、養蚕の町から瓦工業の町へと変貌した。

町の外れに、大小九十基近い古墳群を抱えた生野山(なまのやま)がある。その裾に、下町(しもちょう)と呼ばれる部落がある。被差別部落である。

「わしが嫁御になった日は、途中から雨になってな。下駄をぬいではだしになり、一張羅の着物が汚れねえように尻っぱしょいで、二里の道を歩いてきたんさ。そんでも、そのころとしちゃあ珍しい、簞笥、長持つきだったんで、道端の人たちが〝簞笥、長持、嫁御が通る〟って、とび出して見たもんだ」

明治三十六年三月二十六日(旧暦二月二十八日)、小林きちが児玉へ嫁入りしたときの自慢話である。

きちは明治十七年九月(戸籍上は明治十八年九月)、埼玉県大里郡榛沢村(現、岡部町)の、ほとんどが同姓の家々からなる山中廓と呼ばれる被差別部落に生まれた。小作農の山中長吉、美乃の長女だった。兄三人、弟二人、妹一人、あわせて七人きょうだいという賑やかな家庭に育った。

「あまっこに学問はいらねえ」といわれて、学校教育は一日も受けられなかった。

学齢の七歳になると、きちは地主の家へ通いの子守に出された。手ぬぐいを後ろから前へ回してはち巻きのように縛り、髪の毛が背中の赤ん坊の顔の邪魔をしないようにした。報酬については聞かされなかった。あとあとまで思い出すのは、他人のめしの不味いことだった。

昼と夜だけ地主の家で食事をしたが、地主の家族はいうまでもなく、作男たちとも、いっしょに食事をさせてはくれなかった。みんなが食べ終わってから、やっと背中の子どもを下ろしてくれる。それから、きちは一人だけ残されて食べはじめるのだった。

地主でも小作人でも、農家の夕食は毎晩うどんと決まっていた。つくってから時間がたってすっかり固まってしまったうどんを、汁につけてかっこんだ。夕食は九時前後になり、ひもじかったきちは、おかわりをだした。最初の日こそ黙っていた地主の嫁は、二日目になると、みんなに聞いてくれといわんばかりに叫んだ。

「貧乏人の餓鬼は、なんとガツガツしてるんだがな。そうだから、生まれが悪いといわれるんだ」

きちは、杉林にはさまれた暗い道を泣きながら家へ帰ってきた。しかし父親の長吉は、きちの泣きごとを聞いても、「そんなことぐれえで泣くようじゃ、しようがねえなあ。もっときかなく(強くの意)なんねえと、この世の中は渡っていげねえ」と、そっぽを向いたままでいい、母親の美乃も、「そんでも、新宅(分家のこと)だから、おめえを子守に使ってくれるんだぜ。本家のほうはな、〝あそこいらの餓鬼に子守させると、子どものガラが悪くなる〟って、山中廓の子は使わねえんだぞ」と、我慢するようにほのめかすだけで、取りあわなかった。

それからは、雨の日も雪の日も、きちは子守の仕事から逃れられなかった。日曜もない。いて休日といえば、祝いごとや祭りのあるもの日だけだったが、これとて、地主の家の仕事の都合によっては休むことができなかった。

きちが他人のめしの苦さを味わっているとき、きちの兄弟たちは学校へ通っていた。ふろしきに本を包んで学校へ急ぐ兄や弟たちを、きちはいつも恨めしく眺めた。

「おんなになんか生まれたおかげで、こんな思いをしなけばなんねえなんて。自分が好きこのんでおんなに生まれたわけじゃあねえんになあ」

きちがいくら嘆いても、親兄弟は聞き流すだけだった。

「いずれ、あまっこは嫁御に行かねばなんねえ。姑の下を這うかもしんねえ。他人のめしを食うこたあ、嫁入り前のあまっこの修業でもあるんだ」

母親の美乃は、いつも同じ言葉を繰り返した。

妹のオトも、きちと同じ年齢になると、大百姓の子守に出された。やはり、学校へは行かせてもらえなかった。二人の姉妹は、おんなに生まれたことをたがいに嘆きあうことで慰めあった。

そのきちも、十歳を過ぎると、子守をやめて百姓仕事を覚えるようにいいつけられた。元禄袖の長着に半幅帯をしめて前かけをかける。人目に立つ真っ赤な襷がけが野良着である。冬はこの上に、袷か綿入れの捩り半纏を着るのが、おおかたの娘たちの服装だった。野良仕度をして手ぬぐいを姉さんかぶりにすると、子守姿とはうってかわって、きちは娘らしくなった。

「きちもいちげえに、一人前の娘気になったなあ。腰巻きも作ってやんなけばなるめえ」

美乃は、ひとりごとのようにいうと、翌日には赤い腰巻きを用意した。腰巻きは成人のしるしである。田や畑の仕事をするときは、長着の裾をまくって腰紐で押え、赤い腰巻きをのぞかせて、農作業をするのだった。

田植えになると、こんな野良姿のおんなたちがずらりと田んぼに並ぶ。菅笠と原色の腰巻きが女らしい華やかさをそえて、どこの田も、絵にかいたような光景を繰りひろげた。

野良へ出ると、子どもだからといって甘やかされることはなかった。大人の仕事ぶりをまねながら、数多い農具の使い方を一つずつ覚えなければならない。なかでも、自分の背丈よりも長い柄の鍬を持って畝間を掘り、その土を農作物の根元によせるさく切りをするのは大変だった。しかも、さく切りは農作業の基本だからといって、人並みにできるようになるまで反復して練習させられた。うまくできないと、父親や兄たちから泥の塊を足元に投げつけられる。塊の飛んでくるのをよける暇などなく、背中にぶつかった塊がこなごなになって、首筋から背中いっぱいに土が散らばることさえあるが、それを払うことも許されない。べそをかきかき、そのまま作業を続けなければならなかった。

夜は夜で、両親や兄がしている蚕の網作りを、かたわらで見ていなければならない。〝門前の小僧〟式に、網作りを自分で体得することを要求されたのである。

この地方の養蚕は、籠飼い方式と呼ばれる方法をとっていた。蚕の上に編んだ網をのせ、その上に桑をおくと、蚕は餌を求めて這い上る。上り終わったところで、網の両端を持って別の籠に移すと、〝コシリ〟とよばれる蚕の糞だけ残り、掃除が簡単にすむ。養蚕の収入は農家にとっては他にかけがえのない現金収入だったから、網もたくさん必要だった。いくら編んでも余るようなことはない。自分の家で使った残りは、大きな養蚕家がみんな買っていったから、小遣い銭稼ぎにつながってもいた。

きつい農作業のあとの夜業はつらいこともあったが、いたいけな日の通い子守のことを思えば、愚痴はでなかった。つい居眠りをして兄にこづかれても、他人の笞ほど苦しくはなかった。家で働けることが、きちにはどんなにうれしかったかしれない。

十七歳の正月を迎えると、きちは和裁塾へ通わせてもらうことになった。

「嫁御にくれるんにゃ、てめえの着物ぐれえ縫えねえと困るだんべ。十七にもなっちゃあ、くれる準備をはじめなくちゃあなるめえ」

美乃のこの提案に長吉も賛成したのである。山向こうの里に住む男の師匠の塾だった。学校への憧れを抱き続けていたきちは、和裁塾へ通うことが決まったとき、喜びのあまり涙を浮かべた。竹藪の竹が雪で折れたり曲がったりして道をふさぎ、通り抜けるのが難儀な雪の日でも、鼻歌まじりに歩き通して、決して休もうとはしなかった。

農閑期のわずか三カ月の間だったが、帯や綿入れまで一通り習い覚えた。来年の冬にはまた通わせるからという両親の約束で、きちは春の訪れとともに野良仕事へ戻った。

その年の九月。十八歳を迎えたばかりのきちに、本家の山中和吉から、「いい嫁御の口があるから、そろそろ考えてみねえか」と、縁談が舞いこんだ。

「先方は百姓を一町以上してるんだ。その半分は自分もんでよ。いまどき、五反も自分もんがあっちゃあ、たいしたもんじゃねえか。男は高等科までで、一人暮らしだから、のっつけお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com